



TITLE:

清代における踴布業の經營形態(下)

AUTHOR(S):

横山, 英

CITATION:

横山, 英. 清代における踴布業の經營形態(下). 東洋史研究 1961, 19(4): 451-467

ISSUE DATE:

1961-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148198>

RIGHT:

清代における端布業の經營形態（下）

横 山 英

- 一、はしがき
- 二、包頭の機能
- (1) 端布請負の獨占
- (2) 生産手段と職人の生活資料の準備
- (3) 端布職人の掌握（以上前號）
- 三、端布職人の性格
- 四、布商と端布業
- 五、あとがき

三 端布職人の性格

端布作業に従事する職人は「端工」、「端匠」、「研匠」、「躰匠」などと呼ばれた。雍正八年の李衛の上奏（史料一）によれば、蘇州の端布職人は二萬九百餘人いた。雍正元年の胡鳳聲の上奏（「雍正硃批諭旨」）では、「總計約二萬餘人」とのべている。他の史料でも、「匠以數萬計」とか「所用

端匠盈萬成千」と記して、職人數の多さを報じている。正確な人數は知りうべくもないが、一萬人以上二萬人におよぶ職人が蘇州城の内外に都市労働者として存在していたことは確かである。

これらの職人は、

俱非有家土著之民。

蘇城内外端匠。不下萬餘。均非土著。悉係外來。

と記されているように、土著の住民ではなく、他地方から蘇州に流入してきた出稼ぎ人であつた。その出身地について、康熙九年碑刻は、

所用端布之人。俱從江寧屬縣。遠來□工者甚多。

と述べている。松江府の楓涇の染色職人や端布職人はすべて江寧出身者であるといわれており、江寧からの出稼人は

蘇州、松江など大都市に流入し、端布業に従事した者が多かったのである。しかし、蘇州の端布職人は康熙九年碑刻が述べているように江寧出身者だけではなかった。雍正八年の李衛の上奏では、

皆江南江北各縣之人。遞相傳授。牽引而來。

とのべ、同じ「雍正硃批諭旨」に見える胡鳳翬の上奏（雍正元年）は、

又有染坊端布工匠。俱係江寧・太平・寧國人民。

と指摘している。端布業は、江寧、太平、寧國など、江蘇省と安徽省の蘇州にかなり近い農村地帯から流入した労働力を吸収したのであり、農村から析出された過剰労働力が都市の新興産業の下に吸収されたものである。

端布作業は重さ千斤餘りの凹字形の巨石を足で轉ろがすという單純な労働であるので（「木棉譜」）、農村から流入した不熟練労働力ですぐ就業できた。また、就業條件からいつても、先述のような包頭制の下ではルーズであつて、就業し易うかつた。その上、親方に當る包頭は住居と食事を前貸しするので、裸一貫の他國者が飯にありつく準備が整っていた。他方、包頭の立場からは、單純な肉體労働だ

けが必要なのであつて、とりあえず飯にありつかねばならない浮浪労働力を招集することが、安い労働力を獲得するために有利であつた。また、端布業は不安定な註文加工であつたので、註文が殺到した時には連續的な重労働、註文がない時には全くの遊休、という労働の斷續がおこるわけで、このような作業に労働力をプールしておくには、浮浪労働力ないしは半失業労働力が好都合であつたことは間違いない。先に述べた不安定な包頭制は、恐らく、このような端布作業の技術上の特性と、就業の不定性に基いて形成され、繼續されたものと思われる。

端布職人の出身地は、寧國、太平、江寧の諸縣下からであつたが、それらの地方の中でも地域性があつたものと考えられる。先に引用した李衛の上奏で「遞相傳授。牽引而來」とのべている點からみると、特定地域からツテをたどつて次々と蘇州の端布業に到來したのであろう。康熙四〇年碑刻の記述によれば、職人が就業する際には本籍を登録するだけでなく保證人が必要であつた。知己がなければ就業できなかったわけである。康熙五九年碑刻には職人が自殺した場合の取り扱いを規定して、

或有投河自刎自溢。報官驗明。卽着本匠保人親屬領歸鄉里。

と記している。即ち、自殺者は保證人または親屬が受け取つて郷里にもち歸るわけで、この保證人または親屬は同郷出身者であつたと考えられる。特定地域から逐次あい傳えて端布業に流入すれば、職人相互間には同郷的または血縁的關係が存在し、新しい勞働力の補充もその關係に基いて行われた。値上げ爭議などで、職人は強固な團結を示すのであるが、このような同郷的、血縁的關係が相互の紐帶として強く作用したものと思われる。

端布職人の雇傭關係について、史料のいくつかは、

至於染躑二匠。俱係店家僱用之人。

里中多布局。局中所雇染匠研匠……。

このべて、職人が布商または包頭に雇傭された勞働者であるかの速斷をひきおこし易い表現を用いている。職人が布商と直接的な雇傭關係にないことは第一項でのべたところであるが、加工賃の支拂い形態から考えると、包頭との間にも資本家的な雇傭關係が成立していないことが判明する。普通の雇傭關係の場合であれば、たとえ包頭が布商に對して請負人の立場をとつたとしても、包頭と職人との間

には相互の契約に基いた經濟關係が成立し、賃銀は包頭が自己資本の中から流動資本として支出すべきものである。しかし、端布業の場合は、時代によつて加工賃の額は異なれども、一疋についての加工賃は官憲の政令によつて決定されていたのみならず、規定の加工賃の全額は、布商から包頭を経由して支出された。康熙九年碑刻には「作頭」の權利と義務について記した直後（史料二所引）、

至于端布工價。照舊例每匹紋銀壹分壹厘。兩不相虧。店家、無容短少。工匠不許多勘。

と述べているが、規定の加工賃毎疋紋銀壹分壹厘を加不足なく支拂うことを、「作頭」ではなくて、「店家」に要請している。このことは、加工賃の支拂い者が包頭ではなく、布商であつたことを證明している。このような賃銀支拂いの方法は、清代を通じて變化しなかつた。康熙五九年には米價の高騰のため、加工賃に米價の高低を基準とした特別手當支給の規定を次のように設けこれを「捐助」と稱した。

工價率各憲定例。每匹二分一厘三毫。米價一兩五錢。每千匹加銀二錢四分。米價一兩二錢則止。商店、每兩捐銀五厘。永爲定例。

この場合、米價の騰貴に應じて臨時に増額支給する特別加工賃は、「商店」が支拂うべき「捐助」であつた。規定の加工賃を「商店」が支拂うのであるから、「捐助」もまた商店が支拂うのが當然である。また、乾隆六〇年には、職人への加工賃支拂いの方法に變化があつた。それは、

嗣後各布號、概以陳平九八兌九六色銀發坊。坊戶每兩給九錢五分。餘銀五分。留爲添備家伙之用。

という規定であつて、職人が銀で支拂いを受け自分で錢に兌換することを要求してストライキに訴えた時の解決規定である。銀一兩につき銀五分は包頭の手許に留め置く（それは包頭への手當ではなく、職人の包頭に支拂うべき「家伙之用」の代金として）ことになつたが、職人の要求が認められて、職人が受けとる加工賃は「陳平九八兌九六色銀」で布商から包頭を通じて職人に渡ることになつた。このことから、加工賃は布商から支拂われていたことが明らかで、包頭は仲介したにすぎない。

以上のような加工賃銀の支拂い原則から見れば、布商は踴布の注文主であり、包頭はそれを請負つて職人に仲介するという立場にあり、職人は決して布商にも包頭にも雇傭

されている賃銀労働者ではなかつた。この意味では、職人は一個の形式的に獨立した手工業者としての規定を受けつていた。しかしながら、完全な意味での獨立手工業者の規定を與えうるものではない。包頭は仕事場と一切の生活手段を準備して踴布業に投入したわけで、包頭は労働力の組織者であり、同時に、この労働力を労働手段と生産資材に結合さして、踴布業そのものを組織した仲介人であつた。

それ故に、職人は包頭との間に雇傭關係はなかつたけれども、生産・生活の両面において全く包頭に依存し、事實上は包頭に從屬した地位を脱することができなかつた。この場合、固定的な雇傭關係が缺如していたことが、職人の包頭に對する依存度を高めることになつた。

職人を拘束したのは、事實上の支配力をもつていた包頭だけではなかつた。布商および官憲からも強い規制力が加えられた。康熙九年に職人は加工賃の増額を布商に要求したゼネストに突入した。ストライキは官憲の彈壓によつて鎮壓され、加工賃について「其踴布工價。照舊例每匹紋銀壹分壹厘」と決定が下され、布商の連名によつて碑刻が建立された。これ以前、いつ頃から加工賃が官憲によつて決

定されることになったのかは史料上判明しないが、康熙九年のこの記録以後、加工賃は清末同治年間まで引き續いて官憲によつて規定された。これは布商の要求に基いて、官憲が權力を發動したもので、職人は度々値上げ争議に訴えて、少しづつではあるが加工賃の増額をかちとるが、その場合、例外なく布商の建議に基いて官憲が規定し、布商および職人の兩者に對して嚴重に遵守するよう命じた。布商は加工賃の値上げを防ぐため官憲の權力を援用し、利益を擁護したのである。包頭への生活費の支拂い、即ち、職人一人當り月三錢六分も、加工賃同様に官憲によつて規定された。康熙四〇年碑刻は「工價有例。食用有條」とのべ「工價火食。悉照舊議。不許包頭多克」と遵守を命じている。包頭が毎月徴収する職人の生活費は、職人の加工賃収入と直接關係をもっているもので、布商は加工賃を規定することによつて職人の収入を規制し、生活費を規定することによつて包頭を規制し、政治支配の機構を通じて系統的に布商の利益を擁護したのである。

他方、官憲は値上げを要求する職人の團結、罷業行爲を治安維持の名目の下に彈壓し、それを未然に防止するため

に恒常的な彈壓體制をつくりあげた。⁽⁴⁾ 康熙四〇年に包頭を「甲」に編成し、包頭十家を一甲として連帶責任をもたせ、その中から坊長を選出して甲を管轄させた。職人は本籍、保證人を登録し、就業開始と離職時とを嚴密に記録された。のみならず、蘇州城の守營を總巡とし、これに夜間の警戒を行わせた。續いて康熙五九年には「坊總制」にきりかえ、監理機構を整備し、職人は五人組（互保）を編成させられ、連坐制がしかれた。このようにして、職人は日常生活の全面に至るまで官憲の監視下におかれたのである。その根本的な狙いが、値上げ争議の大衆行動を防止することにあつたことは明かで、この規定の最後の條には「工價各憲定例。……永爲定例。」と明記されている。

雍正年代の記録は、先述の「碑刻集」所收史料が専ら賃上げ防止の觀點から職人彈壓を問題にしたのと異つて、すべて別の觀點、即ち、刑事犯防止それ自體の觀點から職人の取り締りを問題にしている。それは、雍正年代の史料がすべて「雍正硃批諭旨」に收録された地方官の上奏であるためでもあるが、萬をこえる職人集團の中には官憲の警戒心をひきおこさず連中がいたことも事實のようである。雍

正元年の胡鳳聲の上奏には「凡遇盜案發覺。常有踰匠在內」と述べ、同年の何天培、雍正七、八兩年の李衛の上奏も、同じ觀點から、踰匠を犯罪者の巢窟と見なしている。康熙四〇年碑刻にも「今之殺命抵命者。無一非踰匠」と論斷している。踰布職人が潜在的犯罪人としてにらまれたのは、單に賃上げの集團行動に訴えるということのためのみならず、殺人、窃盜などの發源地、あるいは犯罪人の潛伏場所となつたためであつた。史料は、踰布職人が富戸を掠奪しようとして未遂に終つた康熙六一年の事件、雍正元年に職人の變脅公らが「糾集拜把商謀約會」して倉庫の掠奪を計畫し、包頭の密告によつて事前に探知された事件、更に、雍正七年に變爾集ら二二人が「拜把結盟祀神飲酒」した事件を報じている。雍正元年の事件は未遂であつたにもかかわらず三五人が逮捕され、そのうち一三人が死刑に處せられた。また、松江府の楓涇については、「楓涇小志」（卷一〇、拾遺）所引の「天恩錄」は、

里中多布局。局中所雇染匠研匠。皆江寧人。往來成群。擾害閭里。民受其累。積憤不可遏。糾集歛巨費。閉里門水柵。設計憤殺。死者數百人。

と、市民と踰布職人との大規模な衝突事件を掲げている。

李衛の上奏が「因其勢衆合姦良不一」と認めているように、すべての職人がそうであつたわけではないが、職人層の存在形態から考えれば、犯罪の温床になり易い條件を踰布業は備えていたことも、十分推察できる。従つて、犯罪豫防の觀點から職人對策を官憲が實施する理由もあつた。

この目的をもつた本格的な取り締り機構の整備は雍正七年に江南總督として赴任した李衛によつて着手され、康熙五九年に長洲縣と元和縣で實施した「坊總制」を蘇州府および松江府に實施して、統一的・全般的な取り締り體制が雍正九年に實施され、そのための官僚機構も整備された。

しかし、ここで驚異に値するのは、以上のように職人は官憲、布商、包頭によつて、がんじがらめに規制されてきたにもかかわらず、非常にしばしば賃上げ爭議をおこして、最低生活を守つて行つたことである。「碑刻集」所收の康熙九年から乾隆四四年に至る七種の碑刻は、いづれもその爭議の收拾のため出された政令である。職人が無一物の無產勞働者であつたという階級的な存在形態を基底とし、同郷的または血縁的紐帶による仲間の結合と、集合的

な生活・労働形態とを團結の契機として、強固な仲間的結合を組織しえたためであると考えられる。

四 布商と踰布業

踰布工程は棉布生産の仕上げ工程中の最終段階であつて、棉業が一定の段階に達して品質の向上が要求された結果、新しく添加された作業過程である。明清代の史料は、踰布の目的として、布目（縷）をひきしめることによつて布質を強くする（「天工開物」、卷上、乃服、布衣）こと、および、布地を薄くして同時に光澤を出すこと（「木棉譜」）をあげ、棉布の耐久力の増加と品質の向上とを強調している。特に「木棉譜」は、踰布作業を施した棉布は西北地方の乾燥地帯では、布目が緊密なため砂土の附着を避けることができる、その實用的な効果を指摘している。

しかし、踰布過程はこのような實用的な價值を附加することが重要な目的ではない。即ち、巨石によつて壓力をかけ、又、壓力と回轉によつて一定の熱度を棉布に與える踰布加工は、簡単にいえばアイロン・プレスであつて、今日の機械制棉布製造においてサイジング・マシンのよつて行

われる整備工程と同様の原理である。このマシンは、熱風を棉布に加え、ローラーによつてプレスする機械であつて、その目的は、いわゆる「出目をつける」ことである。即ち、棉布のシワをのばし、緊張させ、一定の規格に合致した巾と長さを作り出す。この工程の主目的はあくまで整備・仕上げ工程であつて、布質の強化を添加する實用的な意味が主ではない。

このような仕上げ技術の向上は、棉業の商品生産としての廣範な發展を基礎とし、更に棉布の大量の、かつ、廣い地域に亘る流通を前提として成立したものであつて、棉布の集散地における布商の發展と密接な關連をもつていた。

「雍正硃批諭旨」所收の何天培の上奏（雍正元年五月二十四日）の中では、蘇州では各省の商人に販賣する棉布は必ず染色と踰布した後に運び去られると述べており、同書所收の李衛の上奏（雍正八年七月二十五日）と「皇朝文獻通考」（卷二三、職役考三）は、蘇州から各省に販運される「青藍布疋」は染色と踰布を蘇州で行うと述べている。踰布業は蘇州のみならず、松江府の楓涇、洙涇、あるいは嘉定にも繁榮したのであつて、これら棉布の大集散地において遠

距離貿易の商品として棉布を仕上げ、整備する場合、踰布工程は不可欠の加工過程になっていた。

いつ頃から踰布業者が新しく登場したか上限を示す史料は見出せないが、既に明代より踰布技術があり、棉布集散地でこの加工部門が成立していたことは確かである。「天工開物」(巻上、乃服、布衣)に、

凡棉布寸土皆有。而織造尙淞江。漿染尙蕪湖。凡布縷緊則堅。緩則脆。礪石取江北性冷賦者每塊佳者值十餘金。石不發燒則縷緊不鬆乏。蕪湖巨店首尙佳石。

とあつて、蕪湖では棉布の布目を緊密にして棉布に強靱性を加えるために「礪石」を用いていることを記している。踰布のために用いる石は普通「踰石」と稱されるのであるが、染色のために熱の傳導性の弱い石を用いる筈はなく、「布縷」を緊密ならしめることは踰布以外にはない。棉布を踰布作業に出すことを「發礪」ともいうのであつて、ここにいう「礪石」は「踰石」と同様の踰布のための石に間違いない。明代の蕪湖は染色で有名であつたが、ここで踰布過程が既に成立していたことが判明する。

又、松江府では明代より踰布業が染色業と共に獨立した産業部門として成立していたことが史料に見出される。「消

夏閑記摘抄」(巻中、芙蓉塘)に、

蓋前明數百家布號皆在松江楓涇・洙涇樂業。而染坊・踰坊・商賈悉從之。

という記事があり、楓涇、洙涇には踰布の仕事場と染色の仕事場とが共に存在していた。この兩地は、いづれも松江府城の西南に位し、棉業の發展と共に新しく勃興した町であり、松江棉業の中心地であつた。楓涇については康熙初年以來染色職人と踰布職人(研工)がいたことが「天咫錄」(楓涇小志卷一〇、拾遺所引)にも記されている。

恐らく發生史的には、踰布工程は染色工程の附屬作業として添加され、同一作業場内で染色業がうけもつたものと思われる。先に引用した「天工開物」の記事では、蕪湖の「巨店」が踰布用の石を備えていると述べているが、染色業の本場であつた蕪湖で「巨店」というのは染色工場を指すものと思われ、そこに踰布工程が附屬していた状態、即ち染色業と踰布業との未分離の状態を示していると考えて差支えない。しかし、踰布業と染色業とは明末頃には分離し、同一地域内において社會的分業を形成したようである。前引の「消夏閑記摘抄」の記事がそれを示しており、清代

に入ってから、蘇州の状態がそれをはつきりと示している。

蘇州織造の胡鳳翬の上奏（雍正硃批諭旨、雍正元年四月五日）には「又有染坊踹布工匠」とのべ、又、「乾隆長州縣志」（卷一〇、風俗）では「染布一業。遠近不逞之徒。

往往聚而爲之。名曰踏布房。」とあり、いづれも蘇州の棉布生産について述べたこれらの記事から判断する限りでは、踹布業と染色業が分離していなかったように受け取られる。しかし、胡鳳翬の上奏よりも詳細に踹布業について記述した雍正七年および八年の李衛の上奏（いづれも「雍正硃批諭旨」所收）では、踹布業と染色業とが作業場の上で、また経営の上で結合していることを想像さす記述は全くない。康熙三十二年碑刻には、もし踹布職人が棉布をもち逃げた場合には責任は包頭がもち、棉布加工の註文主である「布號」または「染坊」の店主に損害を及ぼさないという規定がある。「染坊」は踹布の註文主であつて、「染坊」と踹布業とは分離していたことを明らかに示している。「碑刻集」に收められた碑刻も、踹布業關係と染色業關係とは別々の碑刻に政令が刻まれており、内容的にも混

在していない。既に述べたように踹布工程の責任は「包頭」が擔當するのであり、作業場は集合的な作業場をもち、踹布職人の監督・取締りには特別の組織を作っており、作業形態および生活条件の上からも、染色業と未分化ないしは結合していたことは考えられない。

踹布過程は染色過程に連續した仕上げ工程であるために地域的な分業形態を形成することはできない。しかし、同一地域内において社會的分業を形成し、おそくとも明末には踹布業は獨立の産業部門として蘇州、松江、嘉定など主要な棉布集散地において發展したものと考えられる。

蘇州の踹布業の歴史を清初以前にさかのぼつて跡づけることは史料上できない。しかし、最初に松江府で始まった棉織手工業は急速に周邊地域に波及し、明代の中期以降には蘇州府下の諸縣で盛んとなり、清代に入つては「蘇布名稱四方」（乾隆長州縣志、卷一〇、風俗）といわれるように蘇州は棉布生産および取り引きの一大中心地となつた。傳統的な絹織物産地としての性格の上に、更に棉布の生産・集散の新しい發展を基盤として染色業も非常に發展し、萬曆年間には染色職人が數千人に達していた。棉布生

産と染色とに附隨して同一地域に踹布業が成立したことは上述の松江府や蕪湖の例から明らかなことであつて、蘇州でも、清初以前に踹布業が成立していたものと考えることが許されよう。

ところで、蘇州において踹布業が盛んであつたのは、「消夏閑記摘抄」（卷下、李制臺治吳）に「閭門外、社壇・踹坊鱗次。匠以數萬計」と述べ、また、李衛の上奏（史料一）が閭門外一帯に包頭三四〇餘人と踹坊四五〇餘があることを指摘しているが、「皇朝文獻通考」（卷二三、職役考）は雍正九年の記事として踹布作業場が四百餘ヶ所あつたことを報じており、閭門外一帯に四百前後の踹坊が開設されていた。このように踹布業は閭門外一帯の地域に集中していた。この地域は、「乾隆長州縣志」（卷一六）が「布坊各處俱有。惟閭門爲盛」と述べ、更に、他の箇所では、蘇布名稱四方。習是者在閭門外上下塘。謂之字號。漂布・染布・看布・行布各有其人。一字號數十家賴以舉火。（同上、卷一〇）

と述べているように、「字號」とよばれた布商が軒を列べていた地域である。そして、布商の棉布取引に關連した棉布加工業およびその他の附屬業務が集合し、布商の商業活

動に依存して營業を行つていた。踹布業もその一つであつて、獨立の社會的分業を形成しているとはいへ、布商に依存し、布商の下請け業務として存在した。

蘇州閭門内外の布商が、揚子江デルタ地帯の棉布生産・流通の上で、いわば「上級市場」を形成していたことは、棉布の最終的な仕上げ加工がこで行われ、その後、他地方に遠距離貿易商品として搬運された事實から明らかであるが、この間の市場關係を生産者の所までさかのぼつて追求するならば、閭門の布商の商業上の地位が明らかとなる。上海縣で、咸豐年間に、棉布にウドン粉を塗つて品質をごまかす惡風が流行し、咸豐八年にこれを禁止する政令を出した。その時の碑刻によると、

松郡爲產布之區。上海縣各鄉鎮人家。織成布匹。銷售謀生。

と記され、棉布生産者は鄉鎮の民家であつた。そこで生産された棉布が、どのような市場に入りこむかは、次の記事によつて判斷しうる。

爲此示諭各鄉鎮布庄販賣人等。嗣後毋許將面粉塗飾布上。其布行・布號。毋許收買粉飾之布。

この記事に示された市場での賣買關係は、「鄉鎮布庄」が

賣手であり、買手は「布行」または「布號」である。この兩者の取引が成立する場所が市場であつて、「鄉鎮布庄」がウドン粉を塗つて市場に棉布を出したため、市場は粉が落ちて「滿地如泥」という状態になつた。恐らく、「鄉鎮布庄」はその地域の生産者から直接に棉布を買付けて市場にもたらしたのであらう。「道光元和唯亭志」（卷三）に、

布庄在唯亭東市。各處客販及閩門字號店。皆坐庄買收。漂染俱精。

とあるが、この「布庄」は、先に引用した碑刻の「布行」「布號」に當るもので、唯亭東市で「鄉鎮布庄」から棉布を買いつけ、それを閩門の布商にもたらす客商または「字號」の出店であつた。「字號店」にもたらされた棉布は、「字號店」によつて最終的な加工が施こされ、完成した商品として全國市場になげだされた。唯亭東市や上海縣の市場を「下級市場」とよぶならば、閩門の布商による取引は「上級市場」とよぶことができる。この閩門の布商在住の地には、清朝中期頃には、かつて名産地として名前をとどろかせた上海近邊產出の「三梭布」ももたらされ、「蘇布」の名で全國に流通した。⁶⁴清代においては、蘇州は揚子

江デルタ一帯の棉布生産地の上級市場になつて、全國市場向けの棉布を集中し、しかも、それ故に、棉布の最終的な生産（仕上加工）地にもなつたわけで、そのような流通・生産過程を「字號」と稱される布商が掌握していた。

このような布商は、その取引の規模も莫大なものであつたが、⁶⁵數の上でも相當數に上つていた。康熙三二年碑刻に名前を連ねた布商は七六人、同四〇年碑刻では六九人、同五四年碑刻では七二人であつて、何れも踞布業規定に關する官憲の布令を刻した碑刻の末尾に姓名を連ねている。

康熙年間において、布商の數は七〇家前後に達していたわけである。棉布取引の蘇州における産業上の地位、布商の經濟力、更に人數の點からいつて、布商が政治的・社會的・經濟的に極めて有力な階層を形成していたことは容易に推定されよう。その中でも新安出身の布商が有力であつたことが史料によつてうかがわれる。⁶⁶

以上の考察によつて、踞布業の成立、發展が生産地をヒンターランドとした蘇州布商の興隆・發展に隨伴し、これを前提條件としていたことを指摘した。次に問題である布商と踞布業とがどのような關係を作りあげていたかという

ことについては、既に包頭の機能と蹠布職人の性格を考えた際に断片的に觸れたが、問題點のみを整理して明らかにしたい。

先に包頭の機能を分析した際、包頭は蹠布請負の獨占權をもつていたことを指摘したが、このことから、布商自身が蹠布業を經營したものでないことは明らかである。康熙五九年に蹠布職人の監督強化のため「坊總制」が實施され、その政令が碑刻に公示された。この碑刻には、布商四名にならんで坊總一二人、甲長二二人が名を連ねている。坊總は包頭中の「老誠練達者」であり、甲長は月當番の包頭であるから、この碑刻には包頭三名が姓名を刻したことになる。これらの包頭の姓名は、この同じ碑刻中の布商の中に見出せないのは勿論のこと、康熙五四年碑刻に表われる七二人の布商、同四〇年碑刻に名を連ねる六九人の布商、および、同三二年碑刻に見える七六人の布商中にも、一名も同姓同名を見出すことができない。これらの碑刻は年代的に近接しているので、もし布商で包頭を兼ねる場合があれば、同じ姓名が見出される可能性が多い。しかし、それが發見できないのであつて、布商が包頭を兼務するこ

ともなかつたと推測される。先述のような包頭の三つの機能から考えても、布商が蹠布業を直接經營したり、あるいは、包頭という立場で蹠布業を組織することはあり得なかつた。もともと棉布生産においては、仕上げ工程から生み出される剩餘價值は、準備・織布の工程と比較すると僅少なのであり、特に、蘇州のように、過剩勞働力が豊富に流入して來る場合には、包頭存在と役割を容認し、包頭制を維持、強化することの方が、布商の利益をより高める賢明な方法であつた。

布商にとつての最大關心事は、蹠布加工のコストをいかにして最低に止めうるかということであつた。利潤を最大限に引き出すために、布商は社會的・政治的條件、即ち、經濟外的強制を徹底的に利用し、包頭および蹠布職人を規制した。布商は、蹠布業規制のために二つのポリシーを同時に實施した。

その一つは、包頭に對する規制であつて、官憲の權力を援用して、一方では包頭に蹠布請負の獨占權を附與すると共に、その對價として蹠布請負の全責任をおわせて蹠布過程におけるあらゆる損害を避けたことは先に指摘した。布

商が包頭の獨占權を擁護するのは、布商自身の利益が保證される範圍内であつて、布商自身の利益はぬけめなく留保していた。嘉慶二五年に、包頭が連合して請負の繩張りをつきめ、次いで道光一二年には、米價が高騰したことを理由として布商に前借をしたことがある。これに對して布商は斷固として反對し、遂に官憲の命によつて兩者とも禁止された。この結果、「聽號擇坊發端。擇其端踏光明。」という決斷が下され、道光一二年と一四年の二回にわたつて布商の包頭選擇の自由が宣言された。道光一四年の政令に表われた論理から、布商と包頭との相互關係を端的に把握することが出来る。即ち、

且查坊戶向號攬端布匹。是猶佃戶向業攬種田畝。佃戶拖欠租籽。尙得退佃別召。坊匠端不光明。豈竟不能更換。

布商と包頭との間に、地主制下における地主と小作人との關係が類比されているのであつて、相互依存關係と併存して、明白な支配・從屬關係の論理が貫いていた。

しかも、このような支配・從屬關係は、端布契約をめぐる個々の布商と包頭との間に成立しただけではない。むしろ、個々の布商が包頭を支配する前提として、布商全體が

包頭全體を支配している體制があつたことに注意しなければならない。道光一四年碑刻は、

查坊戶領端布匹。先由同業互保。寫立承攬交號。然後立折端。

と布商が包頭と端布請負契約を結ぶ時の手續きについて記している。包頭は同業者の保證がなければ請負契約を結ぶことができなかった。「同業互保」が同業者全員の保證を意味するのか、あるいは同業組合の保證を意味するのか、または、數人の同業者の保證で十分であつたのか、詳細な點は不明であり、保證の内容も明らかでないが、とにかく、同業者の連帶責任において端布契約の完全な遂行が保證された上で、個々の布商と包頭が契約を取り結んだわけである。布商は全體として包頭全體を規制しており、包頭全體を支配することは、とりもなおさず端布業全體の支配を意味した。以上のような布商と包頭との關係が、常に官憲の權力をバックにして維持されたことは改めて指摘するまでもないが、注目しなければならない。

布商が用いたポリシーの他の一つは、端布コストの最低を維持するために行つた對策である。布商の唯一の關心事

である踹布加工賃の問題は、最初から金額が官憲の名において規定され、官憲の許可なくして値上げは實現できなかった。加工賃と密接な關係のある職人の主な支出部分、即ち、包頭に對する生活費の支拂い額も「工賃有例。食用有條」と政治的に規定されていた。また、包頭が賃借りしていた生産手段の借料（賃石租・房金）も政令によつてきまつていた。他方、加工賃の値上げを要求する職人の動きを抑壓するためには全面的に官憲の權力を援用し、包頭を利用して治安維持の名の下に苛酷な彈壓體制を實施したのである。

布商は清代を通じて踹布業を支配したが、その支配は布商自身の經濟力だけによる支配でもなく、また、布商連合によるギルド的支配そのものでもなかつた。官憲の權力を露骨に利用して包頭および踹布職人に對する支配を維持し、それによつて踹布業全體の支配を實現した。布商と政治權力とのこのような密接な結合は、清代の華やかな商業活動の展開を考える上で重要な意味をもつものと考えられ、少くとも踹布業において布商が支配力を持ち得た重要な支柱であつたことは間違いない。

五 あとがき

踹布加工過程における生産關係の上で、踹布業の二つの特徴を見出すことができる。その一は踹布業の性格に關するものである。踹布業が商品生産であつた限り、その生産關係の中に、競争が存在したことは事實である。布商はより能率的で、より優れた加工を行う包頭を選ぶことができる原則があり、また、包頭もより優れた能力をもつた職人を使用することができたであろう。しかし、その競争は、包頭の踹布請負獨占を中核とした生産關係を前提としたものであつて、極めて制限されたものにすぎなかつた。資本、經營、勞働のどの面においても「自由」は見出すことができない。特に、經營全體に對する各種の制限が、布商の利益擁護のために國家權力が發動されていたことは重要な特徴であつて、企業の自由が、權力によつて阻害されていたわけである。

その二は經營形態に關する問題である。本文で論證した通り、包頭は、踹布請負、勞働諸手段の準備、勞働力の確保という三つの機能を統一した人格であつて、踹布業のカ

ナメになった。別の表現を用うれば、包頭は勞働手段、生産資料、勞働力の三者を結合さす組織者であり、しかも、それら三者に對して仲介人としての立場をもつていた。このような經營形態にどのような概念を適用しうるか。集中的マニーフアクチュアの概念が當てはまらないことは再論するまでもない。全漢章氏は「雍正硃批諭旨」および「皇朝文獻通考」の踹布業に關する記載に基いて、踹布業の經營形態は家内手工業制度が發展した結果生れた形態であるとのべている。即ち、家内手工業にあつては、生産者が自身で作業場と生産手段を準備するのであるが、踹布業のように固定資本が大ききものは生産者が自身でそれらを設備することができず、包頭の「投資開設」に頼らねばならない。しかし、踹布設備は本來は生産者自身が設備すべきもので、従つて、職人は毎月設備の借代（「租金」）を支拂つてゐる、というのである。本文で考證したように、「雍正硃批諭旨」（史料一）記載の「房租家伙之費」は生産手段の借代ではないので、全漢章氏が、職人は設備の借代を包頭に支拂うといつておられる點は問題がある。しかし、同教授が職人が集合的に一作業場内で就業しているという外

見的な形にとらわれずに、家内手工業制の進歩した一形態として把握されている點は、誠に示唆に富む意見である。確に、職人の立場からすれば、生産手段と加工材料との提供をうけて出來高拂いで就業しているわけで、この形だけでいえば前貸制の問屋制家内手工業と同一であつて、「踹坊」すなわち作業場は家内手工業者が集合した共同作業場であつた。しかし、問屋制家内手工業においては、前貸制をとるにしろとらないにしろ、問屋と家内手工業者とは直接の關係をもつのであつて、手工業の組織者は問屋である。踹布業において包頭が仲介的組織者として踹布業の生産諸手段を組織していたことを考慮すると、踹布業經營に問屋制家内工業の概念を適用することは踹布業の特徴を誤解に導くおそれが多い。勞働様式の上では踹布業は包頭制であり、ただ包頭が勞働手段を前貸ししている點で、機械制工業に従屬した勞働請負制（把頭制）と歴史的な相違性をもつてゐる。この勞働様式と布商とがどのような關係にあるかということが生産様式を規定する問題である。包頭は原料の仕入市場および製品の販賣市場から遮斷されてゐて、生産上の獨立性はなく、いわば勞働監督と加工請負の

經濟的役割に限定された位置にあり、その意味で布商に對して本來的に従屬している。また、端布工程は仕上げ工程の一部にしかすぎず、この工程での附加價值は全價值の中極めて少い部分にしか當らず、この工程からの剩餘價值蓄積は端布業資本の自立を保證することはできない。このような位置を占める端布業は獨立した企業單位として存在せず、布商（商業資本）の附屬的な外業部として生産上の位置を占めた。

註

(28) 消夏閑記摘抄、卷下、李制臺治吳。

(29) 註(20)碑刻。

(30) 註(8)碑刻。

(31) 註(7)碑刻。

(32) 註(6)碑刻。

(33) 楓涇小志、卷一〇、拾遺所引「天咫錄」。

(34) 註(20)碑刻。

(35) 註(7)碑刻。

(36) 雍正硃批諭旨、雍正元年五月二四日、何天培の上奏。

(37) 光緒重修嘉善縣志、卷三五。

(38) 註(6)碑刻。

(39) 註(7)碑刻。

(40) 長元吳三縣規定各布號給發端布工價統以陳平九八兌九六色銀

(41) 給坊卽以所領之銀每兩給匠九錢五分聽其自行換錢餘銀留爲添留家伙之用各端戶如再滋事定從嚴爲碑記（「碑刻集」所收）。

(42) 註(8)碑刻。

(43) 註(5)拙稿で詳論。

(44) 註(20)碑刻。

(45) 註(5)拙稿に詳論。

(46) 同右。

(47) 雍正七年の李衛の上奏（雍正硃批諭旨）に「其在嘉定者則有王朝。亦係研匠。」と述べている。

(48) 端布業が染色業から分離した本質的な原因は、兩者の間の技術上の、即ち勞働の性質上での根本的な相違にあつた。端布業の作業技術については「木棉譜」に記述があり、これは宮崎市定教授によつて紹介された（同教授前掲論文）。その狀態を示す圖は「御題棉花圖」や John Henry Gray の“China” (1878) に見え、上體を木枠によつて支え、足で凹字形の石の兩端を踏むだけが必要な動作である。

それに反して、染色業は當時高度に發達し、染色の種類も多く、かつ、種類によつて専門化していた。「木棉譜」は、當時の松江府において、藍染専門の「藍坊」、紅色染専門の「紅坊」、漂白を行う「漂坊」、その他黃、綠、黑などの染色を行う「雜色坊」に分れ、それ以外に、花、人物、動物などを種々の色で染める専門店があつたことを記している。従つて、染色技術は相當の熟練を要するもので、職人は長年間の

徒弟の時期を経た後、はじめて一人前になりえた。同治九年四月二八日に浙紹公所が蘇州に建立した「蘇州拂布染司同業章程碑」(「碑刻集」所收)によれば、徒弟は三年間の訓練を経た後、一人前の給料を支給されることになっている。

(49) 註(8)碑刻。

(50) 萬曆二十九年に蘇州で發生したいわゆる「織備の變」(詳細は拙稿「中國における手工業労働者の發展と役割」歴史學研究、一六〇號參照)の際に曹時聘のおこなつた上奏(神宗實錄、卷三六一)。

(51) 上海縣禁止各鄉販布人將面粉塗布并布行號收買粉布碑(「碑刻集」所收)。

(52) 滬濱梭布衣被天下。良賈賴以此起家。張少司馬未貴前。太翁已致富累巨萬。五更篝灯。收布匹。運售閩門。每匹可贏五十文。計一晨得五十金。所謂鷄鳴布也(三異筆談、卷三、布利。傅衣凌「論明清時代的棉布字號」光明日報、一九五六年八月一六日、史學第八九號、所引)。

(53) 同右、および傅衣凌同右論文所引の新安商人汪氏に關する記事。

(54) 康熙九年の端布加工賃および包頭の獨占權と責任について規定した政令の碑刻(註(6)碑刻)の末尾に近く、「爲此飭諭徽商布店端布工匠人等知悉……」とあるところより見れば、この碑刻に名を連ねた二人の布商は新安商人であつたと考えられる。その後、包頭の活動を規制した道光一二年碑刻(註(9)碑刻)、道光一四年碑刻(註(14)碑刻)は、兩者とも「新

安會館」の名によつて建立されている。「新安會館」の名において建立した碑刻が全布商の名に代るほどの實際的な威力をもつていたことが判明する。

(55) 註(7)碑刻。

(56) 率欽差部堂督撫各憲驅逐端染流棍禁碑(「碑刻集」所收)。

(57) 註(10)碑刻。

(58) 註(8)碑刻。

(59) 日本の綿木棉手工業においては、作業段階を準備、製織、仕上の三行程に分けると、労働者の配分は三人、五人、二人となる(手島正毅「日本のマニユ研究における基本的諸問題——古典的マニユ理論の適用について——」歴史學研究、二三〇號)。

三〇號)。

(60) 註(14)碑刻。

(61) 同右。

(62) 同右、および、註(9)碑刻。

(63) 註(14)碑刻。

(64) 同右。

(65) 史料八碑刻。本論(上)二九頁所引。

(66) 全漢章「鴉片戰爭前江蘇的棉紡織業」(清華學報、一〇三)

附記

この論考は、今堀誠二教授を中心として構成している中國近代史研究グループの、昭和三四年度文部省科學研究費の受給による共同研究の成果の一つである。